

次の文章を読み、あとの問1～問7の問いに答えなさい。

夏代は高校三年生。夏休みも半ばを過ぎたが、勉強は思ったように進まない、信頼していた友達とは仲違い^{たが}をする、買ったばかりの音楽プレーヤーは壊れてしまう、と良くないことばかりが続き、何となくイライラしていたところに、今度は財布まで落としてしまい、落ち込んだ気持ちで、交番に届け出た。

交番には若いお巡りさんと年とったお巡りさんがひとりずついて、年とった方が夏代に椅子^{いす}をすすめた。

「落としたのはどこ？」

「あのバス停のどこ……だと思っんですけど」

「どんな財布？」

「えーと茶色い革のヤツで、わりとおつきくて、一方がボタンになってて……」

そここのところで、今まで奥の扉のむこうにいた若い方が、扉から半分顔を見せて大声で言った。

「あー、届いてるよ、それ」

若いお巡りさんは机の引出しから、こともなげに夏代の財布を取り出した。

「これでしょ」

「そうです！」

夏代は飛びあがりたいのを我慢して、財布を引き取るためのいろいろな書類に住所や名前を書きこんだ。中のは何ひとつ失く^ななっていた。

「良かったねえ、無事戻ってきて」

年とった方がニコニコしながら言った。なんだからここ数か月のうちで、久しぶりに^A他人に優しくされたような気がして、夏代は不覚にも涙ぐみそうになりながら「ハイ」と答えた。

帰り際、夏代はお巡りさんたちから一枚の紙きれを渡された。財布を拾ってくれた人の住所や電話番号が書いてあるもので、電話してお礼を言っておきなさいと言われた。

「藤原俊造 七十二歳」

紙きれの一行目に読みにくい行書体でそう書かれていて、住所は世田^{せた}谷区^{がや}玉堤^{たまつみ}となっている。ここから歩いて、さほどの距離ではなかった。

夏代は久しぶりに、ほんとうに久しぶりに明るい気持ちになっていたから、（B）と考えた。

駅前から銀杏^{いちょう}の並木道をずっと歩いていくと、途中にある花屋の店先に明るいオレンジ色の花が咲いていた。何の花かと思って近寄ってみると、それは花ではなく少し早い^{（注）}ほおずきの実だった。夏代はほおずきを買った。愛想のいい店のおばさんが、「少しおまけしときますね」と言いながら一本余分に持たせてくれた。

夏代は、ほおずきを花束のように抱えながら並木道を歩き、坂道を下り、昇り、また下った。

川つぷちの町に着いて、商店街で訊ねながら行くと、その家は案外簡単に見つかった。

ひっそりとした、木造の小さな家の門柱に「藤原」という表札が見えた。人気のない玄関の引き戸の前で、なんとなく入りかねていると、背後で足音が聞こえた。

犬を連れた老人が立っていた。柴犬に似た雑種らしい犬は、はッはッと思を吐きながら立ち止まった主人を見あげている。

「あの……、藤原俊造さんですか」

「そうです」

老人は不思議そうに、ほおずきの花束を抱えた奇妙な女の子を見つめた。

「あの、あたし、お財布拾ってもらった者なんですけども……」

「ああ」

老人は合点がいったように頷いた。

「あの、ほんとにありがとうございます」

そう言っ頭を下げたとたん、唐突に冷たい涙が滝のように夏代の頬を流れ落ちた。びっくりしたのと恥ずかしいのが一緒になった、

夏代の身体の内側を駆けまわった。

夏代は「お礼です」と叫ぶように言っほおずきを老人に渡し、驚いた顔の老人と犬に「さよならっ」と言った。

駅へ続く坂道を、夏代は駆け昇った。心臓がばくばくんと音を立てた。終わりがけた夏の風が夏代の頬をすべっていった。

そう思っしたことでもなくとも、優しさとか善意とかいうものは確かに人間を救うことがあるんだな。わけのわからなくなった頭の中で、夏代はそんなことを考えていた。

何か月ぶりかで走った。何か月ぶりかで身体が汗のぶんだけ軽くなり、そのぶん心も軽くなったような気がした。

（鷺沢 萌『ほおずきの花束』による。）

（注）ほおずきⅡナス科の多年草。実は丸く、オレンジ色に熟す。